

第3章

大学の先進的取り組み調査

【調査概要】

1. 調査目的

障害者スポーツに関わる活動を先駆的に行っている大学の事例収集を行い、今後の大学における障害者スポーツ振興を検討する際の基礎資料を得ることを目的とする。

2. 調査方法

4大学の教員計5名を対象にそれぞれ1時間程度の聞き取り調査を行った（表1参照）。

表1 調査対象機関の概要

所属	順天堂大学	北九州市立大学	久留米大学	広島大学
氏名・役職	渡邊貴裕 先任准教授 渡正 准教授	山本浩二 准教授	満園良一 教授	前田慶明 講師
事業概要・特色	日本版NCAA創設事業における障害者スポーツに関する取り組み	学群内の実習授業における障害者スポーツの取り組み	学部内の実習授業における障害者スポーツの取り組み	学内のアダプテッドスポーツサークルの取り組み

3. 調査内容

主な調査項目は下記のとおりである。

順天堂大学：

- ・日本版NCAA創設事業に関わる学内の取り組み、構想について
- ・インクルーシブ教育や体育に関わる学内カリキュラムの整備について
- ・他団体との連携、学外での活動について

北九州市立大学：

- ・実習授業における障害者スポーツに関わる取り組みについて
- ・車椅子ソフトボールに関わる活動について
- ・障害者スポーツセンターとの連携について

久留米大学：

- ・実習授業における障害者スポーツに関わる取り組みについて
- ・学内における障害者スポーツイベントの開催について
- ・学内のアダプテッドスポーツサークルの活動について

広島大学：

- ・学内のアダプテッドスポーツサークルの活動について
- ・他団体との連携、学外での活動について

【インタビュー概要】

日時：2018(平成30)年8月29日

場所：順天堂大学さくらキャンパス1号館会議室

回答者：順天堂大学スポーツ健康科学部 渡邊貴裕 先任准教授

順天堂大学スポーツ健康科学部 渡正 准教授

聞き手：河西正博（同志社大学スポーツ健康科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

【活動の概要】

2017(平成29)年度にスポーツ庁委託事業「大学横断的かつ競技横断的統括組織(日本版NCAA)創設事業」に採択され、「大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化」、「スポーツ教育の推進」、「スポーツ科学の研究とその成果の社会還元」を柱として、障害者スポーツをテーマとして、学・産・官・スポーツ団体と連携した各種事業を行っている(図1参照)。

1. 学内での障害者スポーツに関わる活動について

スポーツ健康科学部は教員志望の学生が多く、現在では教員となった卒業生たちの教え子が大学に入学するようになってきているが、保健体育教員の免許だけでなく、1981(昭和56)年から特別支援学校教員の免許課程をもっており、普通学校のみならず特別支援学校で教育を行う学生も輩出している。また、「インクルーシブ教育」という言葉に象徴されるように、障害児も普通学校で学べる環境づくりが進んでいく中で、障害児・者も含めて体育・スポーツ指導、教育ができる人材をいかに養成していくかということが2015年頃から学内で議論されており、それが後のNCAA事業へとつながっていったものである。

学内の活動の一つとして、学内カリキュラムの整備が挙げられる。学校現場がインクルーシブな環境に変化している中で、養成課程がインクルーシブになっていないという状況はよくないということで、教職に関わる科目ならびに体育実技の中に、1コマないし2コマ程度、障害に関わる内容を含む形で授業を展開している(図2参照)。

大学スポーツ振興の推進(順天堂大学の取組)

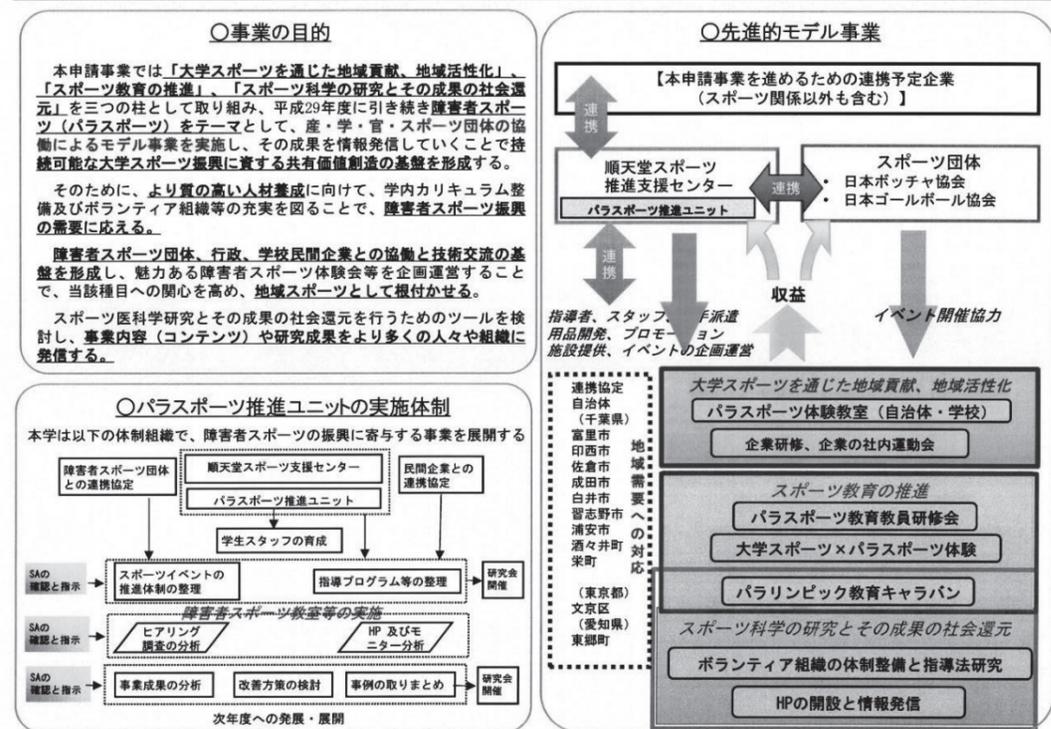


図1 NCAA事業に関わる順天堂大学の取組み(渡邊氏提供)

学生教育：学内カリキュラム整備(特別支援教育の充実)

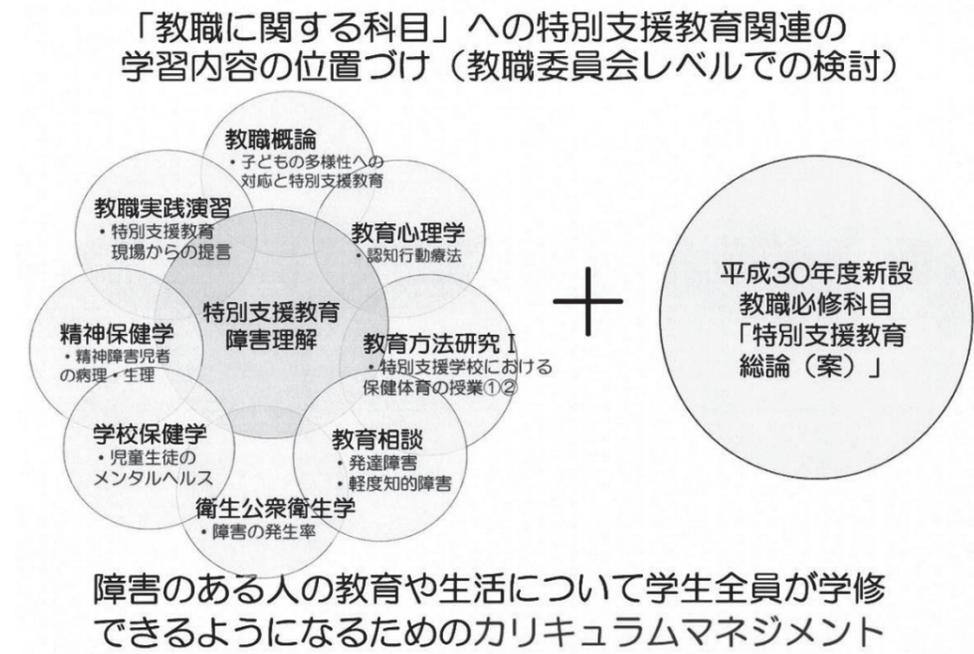


図2 学内カリキュラム整備のイメージ(渡邊氏提供)

他大学では「障害者スポーツ」という科目を立ち上げて、専門の教員が担当しているケースがあるが、それでは「特別な先生が行う特別な授業」となってしまうので、そのよう

な方式はとらず、教職を志望する学生全員にインクルーシブ教育や体育を学んでもらいたいという発想のもと、学内の体制づくりを進めている。具体的な取り組みとして、体育実技をみていくと、バスケットボールの授業の中で車椅子バスケットボール、サッカーの中でアンプティサッカー、バレーボールの中でシッティングバレーボールといったように、各担当教員の協力を得ながら、それぞれの科目の中で近接する障害者スポーツ種目を実施している。また、これらの種目の実施に当たっては、単なる障害者スポーツ体験に留まるのではなく、アクティブラーニングの視点から、「もしクラスに車椅子に乗っている生徒がいたら、バスケットボールの授業はどうやって行うのか」といった問いかけをし、実際の体育授業を想定した取り組みも行っている。

以上の授業での障害者スポーツに関わる展開のみならず、2018年4月から、課外活動団体として障害者スポーツ同好会が立ち上がり、学内外で様々な活動を行っている。2017年度からNCAA事業が本格始動し、日本ゴールボール協会や日本ボッチャ協会との連携（次節参照）の話が進んでいく中で、学生たちに活躍してもらわなければいけないというところで、ボッチャ協会関係者から大会参加の誘いがあり、有志学生がボッチャ東日本大学選手権に出て望外に優勝してしまったことが同好会設立のきっかけであった。その後、ボッチャの活動を通じて特別支援学校教員や協賛企業関係者、選手とのつながりができていく中で、学生たちから自主的にサークルを設立したいという声が上がりに至っている。

現在、80名ほどの学生が所属をしているが、その多くは体育会運動部との掛け持ちをしており、それぞれが部活動とのバランスを取りながら、自分たちでパラスポーツの体験をしたり、近隣市町村や企業向けの体験会などの指導実践を行ったりしている。

2. 他団体との連携・学外での活動について

競技団体との協同事業として、2018年1月に日本ゴールボール協会、日本ボッチャ協会と連携協力協定を結び、各種普及活動、選手強化、特別支援学校向けの競技指導プログラムや教材作成などを行っていく予定である。

当該2団体と連携協定を結ぶきっかけとなったのは、ゴールボールのコーチ（池田氏）、ボッチャのコーチ（村上氏）がいずれも順天堂大学の卒業生で、特別支援学校の教員をしており、2016年のリオパラリンピック視察の際に両氏と話をしたことであった。

NCAA事業の申請に向けて、パラアスリートを積極的に入学させて、直接的に競技力強化を行っている大学もあるが、そこに追随するのではなく、順天堂大学はこれまで体育教員、指導者養成に力を入れてきており、そこに障害者スポーツの要素を加味して、裾野を

広げていくことが重要であるという議論になり、両氏の存在や取り組みが大学として目指すところであると考え両協会との連携が進んでいったのである。

現在、先行して取り組んでいるのは学校での体験教室や普及活動のサポートである。ゴールボール、ボッチャともに他のパラ種目とは異なり、いわゆる障害者独自の種目であり、特別支援学校や普通学校での体験会などのニーズが高く、協会スタッフだけでは活動展開が難しく、同好会の学生たちが指導補助を行っている。また、スポーツ系大学としての専門性を生かして、ゴールボールのゲーム分析や、スポーツマネジメント学科ではボッチャ大会の運営企画への参加など、多角的な関わり方が検討されている。

NCAA事業の柱の一つである地域連携についてはこれから本格的な活動を進めていくが、千葉県の印西市など、連携協定を結んでいる自治体（図1参照）からの要望に応じて上記2種目を中心に体験会や研修会を行っている。また、学生教育の取り組みにもつながるところであるが、児童、生徒向けの体験会のみならず、各種教員研修や免許状更新講習においてもパラスポーツ種目の体験を導入している。

上記の競技団体、行政とのつながりに加えて、近年では企業と連携したパラスポーツの取り組みも進めている。具体的な取り組みとして、凸版印刷が主催した文京区スポーツセンターのリニューアルイベント、SMBC日興証券の社員研修会でのボッチャ体験会の開催、修学旅行の訪問先となっているトヨタ自動車でのボッチャ体験会など、パラスポーツ振興に力を入れている企業との協同による活動も展開している。

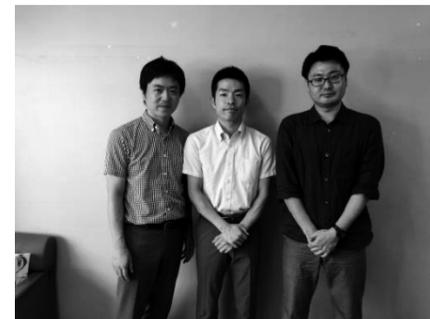
3. 今後の事業展開と課題

様々な事業を展開していくに当たって、まずはより多くの学生が参加できるような仕組みづくりが必要であると考えている。企業や行政からの依頼に対して、今のところ要請を断る状況にはなっていないが、今後依頼数が増えてくると参加学生の調整ができず断らなければならない状況が出てくるかもしれない。また、同好会の学生を派遣する際に、土日のイベントには運動部の学生たちがなかなか参加できず、悩ましいところである。

これらの派遣調整に加えて、イベント参加時の学生の金銭的な負担も勘案しなければいけないところである。現状はNCAA事業の経費で学生たちにサポートをすることができているが、2019年度以降は未定となっており、恒久的に事業を展開していくための仕組みづくりが必要になってくる。現在考えているのは、学生たちの指導スキルを高めてある程度の専門知を身につけることを前提として、備品のレンタルや指導者（学生）派遣で収益を上げて、補助金に頼らずに自立的に活動ができる流れである。また、そのためにこちらが提供できる備品や指導可能なプログラムをリスト化したホームページを作成し、ウェブ上

で依頼を集約できるシステムづくりも NCAA 事業の目標の一つとなっている。

もう1点は体験会プログラムの充実と効果の検証である。学部内の教員同士の連携を強めていく中で、パラスポーツを体験することがどのようなインパクトをもつのかについても学術的に検証していきたいと考えている。さらに、すでに実施している順天堂医院小児科病棟でのボッチャ体験のように、順天堂大学の附属施設や関係団体と連携し、「順天堂ならでは」のプログラムを構築していきたいと考えている。



【インタビュー概要】

日時：2018(平成30)年8月21日

場所：北九州市立大学北方キャンパス会議室

回答者：北九州市立大学地域創生学群 山本浩二 准教授

聞き手：河西正博（同志社大学スポーツ健康科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

【活動の概要】

地域創生学群では、「現場のリアルな理解にもとづく地域の再生と創造」という理念に基づき、1年次から各種現場実習が行われており、山本氏の所属する地域ボランティア養成コースでは、実習の一環として福岡県内の障害者スポーツセンターと連携し障害児・者のスポーツ教室、水泳教室のサポートを行っている。以上に加えて、正課・正課外の活動として車椅子ソフトボールに取り組んでおり、練習を地域に開放し、山本ゼミの学生と障害をもつ選手がともにプレーしている。

また、学群では中級障がい者スポーツ指導員の資格が取得可能となっており、地域ボランティア養成コース（1学年約30名）ではほとんどの学生が中級資格を取得している。

1. 実習での障害者スポーツに関わる活動について

地域創生学群では1年次から実習科目が設定されており、地域ボランティア養成コースでは下記の実習科目が設定されている（表2参照）。1年次の実習では障害者スポーツに関わる活動と高齢者を対象とした「シニア体カアップ講座」の両方に参加をし、2年次から学生個々の関心に応じて、障害者・高齢者領域それぞれに15名ずつ分かれる形となっている。

表2 地域ボランティア養成コースにおける実習授業一覧（筆者作成）

<p>1年次: 指導的実習Ⅰ・指導的実習Ⅱ</p> <p>2年次: 障害者スポーツ実習Ⅰ・Ⅱ or スポーツボランティア実習Ⅰ・Ⅱ 地域ボランティア実践論Ⅰ・Ⅱ（上記科目とほぼ同内容）</p> <p>3年次: 障害者スポーツ実習Ⅲ・Ⅳ or スポーツボランティア実習Ⅰ・Ⅱ 地域ボランティア実践論Ⅲ・Ⅳ（上記科目とほぼ同内容）</p> <p>* 2年次からゼミの配属決定</p>
--

障害者スポーツ領域の実習授業は、北九州市障害者スポーツセンターアレアス（以下、アレアス）での運動教室・水泳教室のサポートならびに、クローバープラザでの車椅子ソフトボールの体験会・講習会の企画運営が中心となっている。参加するプログラムが学年別で設定されており、2年生は毎週水曜日にアレアスで行われる児童スポーツ教室のサポート、3年生は土曜日・日曜日に定期的に行われる水泳教室のサポートを行っている。これらの活動に加えて、ゼミの一環として、クローバープラザで車椅子ソフトボールの講習会・練習会を開催すると同時に、学内で地域に開放する形で練習会を行い各種大会に出場している。

以上の実習教育に関して、他の大学であれば、低年次で実習に関わる知識を身につけた上で各種現場に臨むことが一般的であると思うが、地域創生学群では1年次から実習が単位化されており、地域に学生を出す形を取っている。実習当初、学生たちは障害者、高齢者など、実習先の方々とのように関わってよいのかわからず「ポカーン」とした状態になってしまうことがあるが、参照できるマニュアルのようなものはなく、職員さんや当事者の方々に「どうすればよいですか？」と聞きながら試行錯誤しながら自分なりに学んでいく形になっている。実習先や関係者の方々には迷惑をかける部分が多々あるが、学生たちが実習によって「生きた知識」を学ぶことによって、上級生になってからのゼミや演習での議論が非常に活発になっていくことから、初年次からの実習教育の意義や効果を感じることができる。

これらの実習に取り組む中で課題となっているのは、実習先の利用者と学生との関係づくりである。アレアスでの水泳・スポーツ教室は定期的で開催されているが、学生を毎回参加させてしまうと授業時間数を大幅に超過することになり、それぞれの参加時間、回数を制限せざるを得ない状況になっている。教室参加者との円滑なコミュニケーションをとるためには、学生の定期的な参加が必要になるが、ローテーションでの参加となってしまう、指導、支援以前の人間関係の構築に苦慮している。以前は学生を前半組・後半組に分けて実習を行っていたが、現在は、1回あたりの参加時間を減らす一方、参加回数を増やすことで、できる限り教室参加者と関わる機会が増えるように工夫をしている。

2. 車椅子ソフトボールに関わる活動について

5年前に北九州市立大学に着任し、当初はブラインドサッカー、車椅子ソフトボール、陸上（視覚障害）をゼミ活動として行っていたが、3種目すべてを一人で指導する難しさや学外活動時の引率などの問題から、種目を絞り込む必要があると考えようになり、そこで選んだのが車椅子ソフトボールであった。その理由の一つは、車椅子ソフトボールは学生

（健常者）も大会に出場し、「障害者・健常者が一緒にできる」ことに魅力を感じたからである。また、以前から実習授業でアレアスとのつながりがあり、スポーツ用車椅子を借用しやすいということも決め手となった。

現在、練習は大学体育館で木曜日・金曜日の週2回行っており、木曜日はゼミ授業の一環として学生のみが参加し、金曜日は地域に開放しゼミ学生と障害のある選手がともに活動している。学内の位置づけとしては、団体登録はしておらずあくまでもゼミ活動の一環となっており、大学からの支援はない状況である。※下記の北海道大会のみ、全国大会出場に対する補助金が支給されている。

具体的な活動として、上記の練習の他に福岡県内外での体験会の開催や、年4回の大会（北海道、埼玉、東京、北九州）に出場しており、北九州大会に関しては学生が中心となって企画運営を行っている。

日々活動をする中で、車椅子ソフトボールでの関わりが「その場限りの付き合いではない」ことに大きな意義を感じている。他の実習では限られた時間の中で、その場限りの関わりしかもてず、「壁のようなもの」を残したまま実習が終了してしまうように感じているが、車椅子ソフトボールでは大学入学から3年近く密に障害のある人たちと関わることになり、最終的には「この人の障害って何だっけ」と思えるような関係性が構築でき、障害者であるというよりも一人の人としての関わりがもてることがとても重要であると同時に、その点にこそ教育的価値があると考えている。

また、大学を母体として車椅子ソフトボールという一つの障害者スポーツに取り組む意義の一つは上記の教育的な観点だけではなく、マンパワーが恒常的に不足しないことにもあると思っている。近隣に車椅子バスケットボールや他の種目を行っているクラブがあるが、その年によって選手や支援者の人数に増減があり、活動が不安定になってしまっている状況がある中で、大学生が選手や支援者・指導者として関わることで、安定的な活動が可能となり、実習などを通じて知識や経験をもった学生が障害当事者と関わることで、健常者、障害者双方にとってより充実した活動が可能になるのではないだろうか。



【インタビュー概要】

日時：2018(平成30)年8月22日

場所：久留米大学筑水会館会議室

回答者：久留米大学人間健康学部 満園良一 教授

聞き手：河西正博（同志社大学スポーツ健康科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

【活動の概要】

2017年度より人間健康学部内にスポーツ医科学科が開設され、「地域と連携・協働した健康、スポーツ・運動の支援について実践的に学修する」という理念のもと、正課・正課外において積極的に障害者スポーツに関わる活動を行っている。また、障害者スポーツのみならず、学科開設前より、アスレティックトレーナー（以下、AT）および健康運動指導士の資格認定校になっており、近隣のスポーツ団体と連携し様々な支援活動を展開している。

1. 障害者スポーツに関わる授業について

障害者スポーツに関連する科目としては、障害者スポーツⅠ・Ⅱという授業が、1年次以上で開講されており、2年次以上で、アダプテッドスポーツ特講Ⅰ・Ⅱという科目を開講している（表3参照）。また、それ以外でも、ATと健康運動指導士の資格認定校になっていることから、それらの資格関連授業の中で障がい者スポーツ指導員資格関連科目の一部読み替えを行っている。

表3 障害者スポーツに関わる授業一覧（筆者作成）

<p>1年次以上：障害者スポーツⅠ・障害者スポーツⅡ（両科目とも講義＋実技）</p> <p>2年次以上：アダプテッドスポーツ特講Ⅰ・アダプテッドスポーツ特講Ⅱ</p> <p>* その他、AT、健康運動指導士関連科目で「障害・障害者スポーツ」に関わる内容有</p>

障害者スポーツⅠ・Ⅱの実技部分に関しては、できる限り障害のある人たちと実際に関わってもらいたいという意向から、クローバープラザ（総合福祉、男女共同参画、人権啓発の3センターから構成されている。以下、クローバープラザ）と連携して、センター内の各種教室の指導補助を行っている。また、アダプテッドスポーツ特講Ⅰ・Ⅱに関しては、

西九州大学の山田准教授と日本障がい者スポーツ協会の山下氏（久留米大学卒業生）が担当しており、特講Ⅰでは山下氏から基本的な障害者スポーツのマネジメントや基礎的知識を学び、実践として西九州大学の活動（佐賀県内で行われている障害者スポーツ活動）に参加をする形となっている。また、特講Ⅱ（今年度秋学期より開講）ではⅠで学んだことを具現化する形で、大学で行っている「ふれあいスポーツフェスタ」（イベント詳細は次節参照）をサークル学生とともに企画運営する予定となっている。さらに、現場との接点をさらに作っていきたいと考えており、2018年9月から博多パトラッシュ（車いすツインバスケットボールチーム）が定期的に大学体育館を使用するようになることから、練習のサポートも授業の一環として行う予定となっている。

2. 正課外の障害者スポーツに関わる活動について

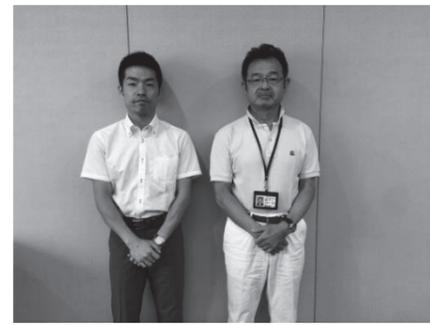
16年前から障がい者スポーツ指導員資格の課程を設置して、学外実習の現場確保という意味合いもあり、14年ほど前に「AST（Adapted Sports Team）」を設立し、学内外で様々な活動を行っている。長年行っている活動として、福岡県障がい者スポーツ協会との連携で、知的障害児を対象とした親子体操教室があり、月に1回、第4土曜日に知的障害児とその保護者を対象とした運動教室に学生が参加をしている。また、上述のアダプテッドスポーツ特講Ⅰ・アダプテッドスポーツ特講Ⅱの授業内容と重複する部分があるが、博多パトラッシュの練習サポートならびに、ラッキーストライカーズ（ブラインドサッカーチーム）の活動にもASTとして関わっていきたいと考えている。

ブラインドサッカーとの関わりについては、ブラインドサッカー日本代表の黒田選手が久留米大学の卒業生で、もともと学内にはブラインドサッカーに関する素地があり、そのような中で、ブラインドサッカーの普及や体験などを積極的に行っている上村氏（北九州スポーツクラブACE理事長）から活動に対する協力依頼があったことがきっかけとなっている。

また、ASTの中心的な活動の1つとして、「ふれあいスポーツフェスタ」の開催が挙げられる。ASTの学生が企画運営を行い、関連団体（親子運動教室・博多パトラッシュ・関係大学など）の協力のもと、年1回のイベントを開催している。実施種目は年によって多少の変更はあるが、ブラインドサッカー、ふうせんバレー、卓球バレー、車いすツインバスケットなど、十数種目の体験を行っている。



図3 ふれあいスポーツフェスタチラシ



【インタビュー概要】

日時：2018(平成30)年9月10日

場所：広島大学霞キャンパス会議室

回答者：広島大学大学院医歯薬保健学研究科 前田慶明 講師

聞き手：河西正博（同志社大学スポーツ健康科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

【活動の概要】

2014年に、学生有志によって広島大学霞アダプテッドスポーツクラブ（以下、ASC）が設立され、県内外の大学と連携しながら各種障害者スポーツの体験会や教室、大会時のボランティア活動などを行っている。

1. ASCの活動について

広島大学への赴任以前は兵庫県で理学療法士をしており、その頃から障害者スポーツとの関わりがあり、着任してから広島県でも何か活動をしたと考えていたところ、県内の障害者スポーツ関係者からイベントの紹介があり、学生にボランティアを募ったことがきっかけとなっている。もともとは教室、大会などのボランティアに学生数名と参加していたところ、学生からサークルを作りたいという声が上がリ、設立当初は理学療法学専攻の学生のみが参加していたが、活動が広がっていく中でメンバーも増えていき、現在では作業療法専攻、看護学専攻の学生も参加しており、総勢約40名程度の学生が活動をしている。

ASCの理念

SINCE 2014

- ①学生であるからこそできる支援方法を実践していく
- ②障がいのある方とない方とのつながりを生み出していく
- ③「アダプテッドスポーツ」を世間に広め、認知度を高めていく
- ④医療従事者になる者として、机上の学習では学ぶことのできない実践的な知識を得る



図4 ASCの活動理念（前田氏提供資料）

5、6名の役員学生が中心となって活動調整や役割分担を行っており、3年ほど前から三原キャンパスの学生とも連携を取るようになり、両キャンパスで活動が広がってきている。また、広島大学内のみならず、県立広島大学、広島国際大学、大分大学、鹿児島大学、西九州大学など、県外で同様の活動を行っている大学との連携も行っている。

表4 ASCの主な活動（前田氏提供資料より筆者作成）

2017年		2018年	
5月	ASC内ミニスポーツ大会	1月	パラバドミントンイベント
	広島県ASC交流会	2月	*ESRDサークル&ASC交流会
7月	広島市立高須小学校体験会	4月	広島市障害者ボウリング大会
	中区スポーツ研修会	5月	東区スポーツセンターまつり
9月	電動車椅子サッカーフェスティバル	6月	広島県・広島市障害者陸上競技大会
	ポッチャ大会		ハートフルフェスティバル
10月	障害者セーリングピースカップ	8月	YMCA米子×皆生スポーツ広場交流会
11月	霞際ポッチャ体験会		
12月	中区スポーツセンターまつり		

*ESRD 2002年に西九州大学で「Enjoy Sports & Recreation Day」というイベントが開催されたことを機に同大学に設立されたサークルで、様々なアダプテッドスポーツ支援を行っている。

現在、他大学との交流や、障害者スポーツ体験会の開催、大会ボランティアなど、サークルの活動は多岐にわたっている。また、附属病院内にあるスポーツ医科学センターの理学療法士と連携をして、センターが関わる大会やイベントなどの運営も行っている（表4参照）。

大学に着任して今年で8年目になり、障害者スポーツに関わる活動を始めたのは5年ほど前になるが、大学内外での活動が急激に広がってきていて正直なところ驚いている。これらの活動に際しては、「アクティブラーニング（学生の主体的な学び）」を意識しており、学生が主体的に動いているいろいろなものを感じ取ってほしいと思っていたが、想像以上に学生たちがよい意味で「勝手に」活動してくれて、こちらが逆に勉強させてもらっている部分が多々ある。

ASCの特徴は他の学内サークルとは違い、積極的に地域に出ていくことで社会とのつながりがある、様々な障害のある人たちとのつながりがあることだと考えている。そのような環境の中で学生としてどのような態度を取ればよいのか、節度のある対応ができるのか、送り出している教員としては非常に神経を使うところでもあるが、そこで、障害のある人たちや指導員がしっかりと注意をしてくれることがありがたいところである。学生はボランティア活動という意識なのかもしれないが、障害のある人たちからいろいろな話を聞い

て、触れ合うことそのものが貴重な教育の機会となっており、臨床実習や医療従事者になるための心構えという部分でも非常に意義のある取り組みであると思う。



【まとめ】

本研究プロジェクトでは、2016年度から障害者スポーツに関わる先進的な取り組みを行っている下記9大学にインタビュー調査を実施してきた（表5参照）。

表5 インタビュー調査先一覧

調査年度	調査対象	主な活動
2016	日本体育大学	パラアスリート学生の競技力強化、パラアスリート奨学金
	立教大学	身体障がい者水泳連盟との連携協定、学内プールの貸与
2017	筑波大学	茨城県の寄附講座、オリ・パラ総合推進室の設置
	大阪府立大学	ボッチャの競技力強化・普及振興
	北翔大学	車椅子ソフトボールの普及振興
2018	順天堂大学	NCAA創設事業における障害者スポーツ振興
	北九州市立大学	実習授業と各種障害者スポーツ活動の融合
	久留米大学	〃
	広島大学	学内サークルの各種障害者スポーツに関わる活動

以下ではこれまでの調査から得られた知見をもとに、大学における障害者スポーツ振興の方策について整理をしていく。

①アスリート養成型

日本体育大学では、2020年の東京パラリンピックを見据えて、陸上競技部内に「パラアスリートブロック」を設立し、所属学生である重本（旧姓：辻）沙絵選手が2016（平成28）年のリオパラリンピック女子400mで銅メダルを獲得した。また、2017（平成29）年度からは公益財団法人日本財団の支援を得て障害者スポーツに特化した奨学金制度を設けており、陸上競技の他、パラバドミントン、車椅子バスケットボール、卓球、水泳、アイススレッジホッケーなど、様々な種目に取り組むアスリートが奨学生として入学し、在学、卒業生のパラリンピック出場という目標に向けて支援を行っている。

上記の取り組みに加えて、日本体育大学は47か所の地方自治体と連携協定を結んでおり（2016年調査時）、オリンピックに関わる講演や諸事業を行い、これらの中にはパラリンピアン派遣や障害者スポーツの体験、講習会開催なども含まれており、普及啓発という視点も含まれてはいるが、体育系大学という専門知、環境を生かしたパラアスリートの競技力強化を前面に打ち出しており、「アスリート養成型」の取り組みであると言える。

②バランス型

筑波大学、順天堂大学、立教大学では、行政や競技団体との連携、外部資金の獲得によ

って、学内外様々な場において多様な取り組みを行っている。

筑波大学は、2017（平成29）年7月に茨城県と「アダプテッド体育・スポーツ学寄附講座」設置に関する協定を締結し、県内の特別支援学校や福祉施設などにおける障害者スポーツ指導者の育成や選手発掘・強化に関わる研究推進ならびに、障害者スポーツの活動拠点形成等を図ることを目的に寄附講座が設置された。また、同年、大学本部に「オリンピック・パラリンピック総合推進室」が設置され、学内外のオリンピック・パラリンピックに関わる情報を集約し、発信している。

順天堂大学は、2017（平成29）年度にスポーツ庁委託事業「大学横断的かつ競技横断的統括組織（日本版NCAA）創設事業」に採択され、「大学スポーツを通じた地域貢献、地域活性化」、「スポーツ教育の推進」、「スポーツ科学の研究とその成果の社会還元」を柱として、自治体や各種学校でのパラスポーツ体験会の開催、学内の障害者スポーツに関わるカリキュラムの充実、企業とのパラスポーツに関わる事業連携など、様々な取り組みを行っている。

立教大学は、2014（平成26）年7月に、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟と池袋キャンパス内室内温水プールの利用に関する覚書を締結し、連盟強化指定選手、育成選手が年間140～150日程度使用し、合宿時には新座キャンパスプールも使用している。また、2017（平成29）年度より同連盟と連携協定を結び、施設貸与のみならず教育研究分野での連携を進めている。また、2017（平成29）年7月に、豊島区と「2020年東京オリンピック・パラリンピック事業における連携協力に関する協定」を締結し、障害者スポーツの推進と、スポーツボランティア育成に関わる連携事業を実施している。

上記3大学に共通するのは、大学内、地域両方において、競技力強化、普及啓発両面を志向している点である。筑波大学では茨城県との連携によって、県内の選手発掘、競技力向上のみならず、学内では寄附講座の設置により特別支援学校教員の能力向上を目指している。また、順天堂大学では上述の学内、地域での障害者スポーツ振興に関わる取り組みのみならず、2018（平成30）年1月に日本ゴールボール協会、日本ボッチャ協会と連携協力協定を締結しており、両種目の普及啓発、競技力向上に関わる事業を展開している。立教大学においても、障害者水泳の競技力向上に加えて、大学の近隣自治体と連携し各種普及活動を行っている。

以上のことから、これらの大学については、多様な機関との連携によって競技力強化、普及啓発など、様々な事業展開を進める「バランス型」の取り組みであると言えるのではないだろうか。

③単一種目焦点型

大阪府立大学、北翔大学では、特定の種目に焦点を絞って競技力強化、普及啓発が行われている点が特徴的である。

大阪府立大学では、主に①ボッチャの競技力強化支援、②大阪府立大学ボッチャ部の創設、③杏林大学との連携協定によるボッチャの普及・競技支援が行われている。競技力強化支援として「ボチトレ」が実施されており、トレーニングの実施に留まらず学内の関係教員がトレーニング効果の検証も行っている。また2017（平成29）年度より学内にボッチャ部が設立され、支援活動のみならず学生が「プレーヤー」として活動している。さらに、学外での共同事業として、2017（平成29）年に杏林大学と連携協定を締結し、ボッチャの普及強化に関わる様々な活動が展開されている。

一方の北翔大学では、大西昌美教授が、2008（平成20）年よりベースボール型車椅子競技の開発を始め、2012（平成24）年に北米を中心に普及している「車椅子ソフトボール」を日本に導入し、2013（平成25）年に「一般社団法人日本車椅子ソフトボール協会」を設立し、協会の運営に携わっている。また、北翔大学は車椅子ソフトボール協会の事務局、ならびに「NORTHLAND WARRIORS」の活動拠点となっており、大西氏のゼミ学生や障害のある競技者が定期的に練習を行っている。

上記2大学は、所属教員がそれぞれ競技団体の役員を務めており、教員の専門性を生かして競技力強化・普及啓発を行っていることから、「単一種目焦点型」の取り組みであると言える。

④正課・正課外活動一体型

北九州市立大学、久留米大学は、障害者スポーツに関わる活動が授業の一環として実施されている点が特徴的である。

北九州市立大学地域創生学群では、「現場のリアルな理解にもとづく地域の再生と創造」という理念に基づき、1年次から各種現場実習が行われており、山本浩二准教授の所属する地域ボランティア養成コースでは、実習の一環として福岡県内の障害者スポーツセンターと連携し児童スポーツ教室、水泳教室のサポートを行っている。以上に加えて、正課・正課外の活動として車椅子ソフトボールに取り組んでおり、練習を地域に開放し、山本ゼミの学生と障害のある選手がともにプレーしている。

また、久留米大学は、2017（平成29）年度より人間健康学部内にスポーツ医科学科が開設され、「地域と連携・協働した健康、スポーツ・運動の支援について実践的に学修する」という理念のもと、正課・正課外において積極的に障害者スポーツに関わる活動を行って

いる。また、障害者スポーツのみならず、学科開設前より、アスレティックトレーナーおよび健康運動指導士の資格認定校になっており、近隣のスポーツ団体と連携し様々な支援活動を展開している。

以上のように、両大学では地域での障害者スポーツに関わる活動が授業内に組み込まれていると同時に、正課外でサークル活動も積極的に行われていることから、これらの取り組みは「正課・正課外活動一体型」と言えるのではないだろうか。

⑤サークル活動主体型

広島大学では、2014（平成26）年に、学生有志によって広島大学霞アダプテッドスポーツクラブ（ASC）が設立され、県立広島大学、広島国際大学、大分大学、鹿児島大学、西九州大学など、県内外の大学と連携しながら各種障害者スポーツの体験会や教室、大会時のボランティア活動などを行っている。

活動内容としては、障害者スポーツの普及啓発に関わるものが中心であり、上記④と同様のものであるが、活動が授業や学内の組織を母体としたものではなく、学生が主体的に進めているサークル活動であることから、「サークル活動主体型」と言えよう。

（河西正博）